

「いざ起て戦人よ」

これから何になるんだろうね。これからどうなるんだろうね。先のことは誰にもわからないなあ。図書館には古い本がたくさん並んでいた。なんでも何十年も前に高校生のまま交通事故で亡くなった女の子の蔵書だそうだ。瑠子という人らしい。瑠子さんは綺麗な子で本とともにガラスケースの中に納まっている。日付から推測するとかれこれ二十年以上も前の先輩だった。ただ、その人は高校生にしてはませていて、しかもやたらと政治的に偏向していて原爆反対の本が多かった。

その人に少しでも近くなりたいと敏雄は少しづつ本を読み進めるうちに次第に厭世的な気分になり尽くされた。米ソは原子爆弾だらけだ。地球は何度でも破壊できる。それならば、この先、どう生きていけばいいのだろうかなんて思っていた。

敏雄は次第にぼんやりすることが多くなつて授業中も何度も教師に注意されていた。

或る日、虎といわれている男、竹虎から「お前はそのうち殴られるぞ」と予告された。「どうして？」とパンチパーマのいかつい虎に尋ねると「範行が怒っていた。ソフトボールのためのグラウンドを確保していないから」と答える。「グラウンドは使えない、だいたソフトボールなんて認められるわけじゃないじゃん」「どうして」「担任はサッカー部の顧問なんだぜ」「うるせえ、俺らはサッカーは嫌いなんだ」虎は、いきなり教室の机や椅子を蹴り飛ばして女生徒たちは逃げまどった。虎の仲間の靖之も騒ぎを聞いて走り寄ってきた。

敏雄は前年に靖之と喧嘩していた。靖之は、ナイフを出したので敏雄はかなり怯えたのだが、靖之の身長は一メートル五十センチしかなくリーチがないためにナイフが届かず敏雄に殴り飛ばされたのだった。とはいっても周りの女子から敏雄は軽蔑の眼差しを激しく浴びることになり教師からも厳しく叱責された。暴力はいけないと。ナイフを突きつけられても話し合いで解決しなさいと諭された。なあに大丈夫、あんな果物ナイフじゃ刺されても死にはしないよという教師さえいた。そうだろうか？それでも明らかに自分より弱そうな男を殴ったことは悪いし、周囲の自分に対するイメージが暴力からほど遠いものなどというのも実感したし、靖之はナイフの件で停学一か月の処分を受け、自分は何もお咎めなしだったので、以後は暴力に巻き込まれていくことなしに平穩に過ごそうと決意した。けれど靖之は敏雄に殴られたことをけして忘れはしないだろう。彼の意識の中では、ナイフを持つて身構えてもそれは威嚇に過ぎなかったのだから。仕返しは今日なのかかもしれない。けれどもさまざまな本を読むことで暴力が次々にエスカレートしていけば最終的には原子爆弾につながるという認識が彼の決意を強めていた。

靖之には注意していたが、それでも竹虎の云うことなんかは、どうせ脅しに決まっている、と思う間もなくひよろひよろとした、しかし目つきすこぶる悪い範行が現れ、廊下から走り寄ってきていきなり敏雄の頬を殴りつけた。痛くて頭の中に星が瞬いた。本当に星が出るのだと改めて感じた。敏雄は前屈みになって顔を両手で覆った。ボクサーのように。範行は容赦なく頭や腹を殴りつけた。速射砲のようだが、当たるタイミングを見計らって僅かに敏雄が身体を後方にずらすので最初の数発ほどには効果がなく何度も打つうちに疲れからか威力も薄れてきた。そして、瞬間的に隙ができた。弱い相手、あるいは無抵抗な相手を殴ると気が抜けるのも当然だった。範行の顎が間抜けた無防備を露わにして視界にはいつてくると、いまだ打て、という声と、よせ大怪我になるぞという声が同時に

聞こえてきて敏雄は大いに迷った。迷っている最中にも範行は殴り続けてきたが、もともと殴られる根拠も殴る根拠も薄弱なので見た目は派手であっても器官が損傷するには到らない。やっぱり大学にも行きたいからこんな連中とかかわりあうのはよそう、それならばあと数発で終わるのだから一発の逆転の致命傷を彼に負わせるのはやめておこう。そんなのは自分のためにもよくない。ここで俺が強烈なパンチを浴びせれば油断している範行にはダメージが大きすぎる。彼は今までに殴られたことがないのだろう。そうでなければこんな隙があるはずがない。敏雄はずっと喧嘩ばかりしてきたから冷静だった。もし憎悪が追加されれば喧嘩はどんと卑劣になる。遺恨は相手の油断や隙を付け狙うようになり陰湿さを伴う。もう四六時中、臨戦態勢になってしまう。受験勉強どころではない。

教室の誰かが告げたらしく、やがて教師が現れふたりは引き離された。体育の教師は喧嘩の理由を尋ねた。ソフトボールのグラウンド確保について範行が切り出すと教師は半ば呆れたように許可しないとさっぱり拒絶した。彼はサッカーにしか関心がない。わかりきっていたことだ。範行が敏雄を殴りつけたのはそれだけが理由ではなかった。敏雄をなんとなく気に入らない、仲間にならないというのが理由だった。教師は範行を停学にするのに躊躇はなかった。

それから数日のあいだ、敏雄の所属する放送部の連中は以前にもまして敏雄に親しくしてきた。話を聞くと今まで黙ってきたけれども範行に殴られたりカネを巻き上げられたりしたことがあるというのが何人もいたのだ。竹虎はかおりに売春させて貢がせていると或る者は語った。女子の部員も敏雄が喧嘩するよりも耐え忍んだ方が絶対がいいと称賛してくれた。

「前と違って大人になったねえ」

「あれは相手が悪すぎるよ」しのぶが云った。しのぶは敏雄がいかにも無様に殴られたかを放送部の連中に語った。同じクラスはしのぶだけだったから。しのぶは範行とは中学からの知り合いだった。しのぶは麻薬の密売をしている男とつきあっていると噂されていた。敏雄は竹虎から聞いていたのだ。泥沼だった。そう彼らは何度も何度も停学処分をくらってやがては退学していく道をまっすぐに歩んでいる。

部活が終わったあと、帰りの坂道でしのぶに呼び止められた。最近に髪を切ったらしくショートカットヘアになったしのぶは快活なはきはきとした女性だったが、ふいに筆箱から煙草を取り出したのは少しびっくりした。

「まだ学校の中だからよせよ」

「話があるの」しのぶの丸い目が痛いくらいに迫っている。

「私とつきあってくれない？」

「ううん」敏雄は好きな女がいた。それは今までに何度もしのぶに告げたはずだった。それから大学への受験勉強をしなければいけないから誰ともつきあうつもりはないこと。自分は煙草を吸うのは悪いことで停学になるからとか、例の麻薬関係のつきあいがあるからなどとくどくどとつきあえない理由を並べ立てた。

「そういううじうじした態度好きじゃないわ。じゃあね」しのぶは駆け出していった。ポプラの緑の葉が眩しかった。

敏雄はクラシックギターを抱えて懸命に唸っていた。夏には楽器も作らされ、秋には作

詞作曲してデモテープをつくらされた。今回は、ユーミンの「いちご白書をもういちど」の弾き語りだった。既に古い歌である。敏雄は聞いたこともない。先生が学生の頃に流行った曲だそう。そう何とも濃密な授業が展開されてきた。大野先生は左翼思想の持ち主の男性歌手だった。太った体格で低い声を時折響かせていた。なぜか反戦運動や自分のコンサートの特ラシを生徒に自ら配布していた。敏雄はクラスで、ただひとり合格点をもたらえず弾き語りの追試を受けていた。

碧も合格していなかったがつい先ほど合格した。もう教室に戻ればいいのに音楽室に侍女のように立ち竦んでいる。授業は始まっているのだ。教室の方からガヤガヤ騒いでいるのが聴こえてくる。碧は長い髪で、顔がよく見えず。話すこともほとんどなく、青白くて美人なのかもしれないのに幽霊と呼ばれ、みんなに忌み嫌われていた。竹虎や靖之からたびたびからかわれて、フラストレーションのはけ口にされてきた。彼女は歌が下手なわけではなく学校を休みがちなので音楽の授業にも出席していなかっただけだ。合格になり碧も安堵したらしく、うっすらと笑みさえも浮かべていた。余韻を味わいたいのかもしれない。停学になってこない奴もいれば自分からこない奴もいる。碧の懸命な歌声をしっかりと頭に残してギターのコードはともかくも歌で誤魔化して、敏雄も合格を勝ち取った。大野先生は苦い表情だった。「大負けだぞ。お前の歌を聴いていると俺まで調子が悪くなるぞ」それから碧の方を向いて「生きてる間は元気良くしろよ、俺の妹は高校生の時、元気だったぞ」とづけずけと云った。

彼は敏雄が本心で反抗した唯一の教師だった。作詞した時に言葉のセンスがないといわれて猛反発したのだった。自分の詩は国語の先生にもよく褒められているからそんなはずはないと。大野先生は頭を抱えていった。「歌詞というのは唄えなきゃ意味ないんだ」

音楽室に戻るとクラスメートは仲間内でグループをつくっていた。何事だろうと黒板をみると大野先生の文字で

「混声合唱が次の課題だからグループに分かれる。男子2名、女子2名、課題曲は【いざ起て戦人よ】」

ところが、敏雄と碧は遅れてきたのでグループにはいれなかった。もちろん前の弾き語りでようやく合格点をもらう程度だから嫌われているということもあった。

ふたりで戸惑っていると「グループに入ってあげるよ」しのぶが云った。あの日以来、初めてしのぶと話した。他のグループから抜け出してきたのだ。相も変わらず煙草くさいなど敏雄は思った。親切ではあるがグループの人数が合わなかったこともある。そして三人が集まると他のグループの帳尻はあった。「あと範行が欠席しているからここにはいれないな」大野先生が云った。

敏雄は口にした。「最高のメンバーだな……」碧はうつむいていた。

やがて合唱部ばかりで構成されたメンバーが模範的に歌い始めた。彼らにとつては、昨年のコンクールで唄ったことのある混声課題曲としてはベーシックなものだった。ソプラノ、アルト、テノール、バスで各パートは別々の楽譜を渡された。範行が停学になってくるから彼がどちらのパートを歌いたいのかはわからない。どっちでもいいとは言わないだろう。

♪いざ起て　いくさびとよ　みはたに　つづけー　おおしく　……

合唱部は合格した。大野先生はしくじった。合唱部員ばかりのグループは禁止するべき

だった。練習時間に二十分充てられた。とりあえずテノールを敏雄は選択。しのぶはソプラノ、碧はアルト。三人は適当に唄っていた。他人のパートにはまったく関心はない。入り乱れたクラス中の歌声で誰が何を唄っているのかさえわからない。やがてそれぞれのグループはその場で試験になって唄いはじめたが合唱部以外は当然のごとくに合格はしなかった。敏雄たちのグループで叱責されたのは、しのぶだけであった。理由は、お前の声しか聞こえない。上手くもないのに大声を出すなというひどい言葉だった。

次の授業は三日後の木曜日だった。

顔を出した停学明けの範行は、英語の教科書を丸写しして提出していた。途中でつまらなくなつて「フアック、ユウ」とまるまる一冊分ノートに書きつづつてもう二日停学が延びてしまった。「アイ、ワズ、ボーン」に変えたらなんとか認められたよ。と笑顔だった。それ、国語の教科書の吉野弘の詩だろう、と敏雄は内心つぶやいた。敏雄とのぎくしゃくした関係は修復されない。簡単だからと、しのぶはテノールの譜面を範行に手渡して、自然に敏雄はバスのパートに落ち着いた。二回目は、はじめて四人が揃ったが、意外にも範行は楽々と唄っていた。大野先生の矛先は、敏雄と碧に集中した。碧のアルトの声が小さすぎると怒りまくっていた。「はつきり言つて四人とも同じパートを唄っているじゃないか」クラス中は爆笑の渦だった。今度は何組か合格者が出た。敏雄は声が高くバスの低い声は出ないのだ。碧は唄っているのか如何かさ定かではない。敏雄は急速にやる気が消滅していくのを感じた。

次の火曜日の音楽の授業は、授業時間内での最後のテストということになった。今回を逃すとあとは放課後の四時以降でしかテストは受け付けないと大野先生は言い放った。

その甲斐あつてか、生徒たちは懸命に唄い、ほとんどのグループは合格した。前回に手ひどくこきおろされた碧は自宅に引きこもっていた。そればかりか、しのぶはトイレでの喫煙がばれて停学処分を受けてしまった。ふたりだけじゃ話にならないが、唄ってみると言い、男ふたりで唄ったが、敏雄はぜんぜんお話にならないといわれただけだった。

それでも敏雄はほとんど気にしていなかった。やがて授業ではテストは行われなくなった。誰もが安心していった。しのぶが復帰して、碧も立ち直つて、範行も特に敏雄を意識することもなく十七歳の冬が通り過ぎて行った。

年が明けると大学進学コースと就職コースに分かれる選抜テストがあり、敏雄は進学コースに進むことが内定した。しのぶは就職コースになった。

「あたし産婆さんになるのよ」

「助産婦っていうんじゃないの？」

「いいの。産婆さんで」

「なんでまた」

「あたしね。生まれたばかりの赤ちゃんをみるのが大好き。それだけのことよ。希望の塊みたいな気がするね」

敏雄の親しくしていた女性は、やけに古風な職業を目指していた。「お針子さん」になるうとしていたり。なかでも驚いたのは敏雄が密かに憧れていたゆかりが高校卒業と同時に三十過ぎの弁護士と結婚するということだった。彼女は許嫁だったのだ。時の流れは容赦なかった。それぞれのコースがはつきりとみえてくるともうバカなことではしていられなかった。敏雄は、学校が引けるとすぐに進学予備校に通うようになった。低迷する成績に

見かねた両親が勝手に決めてきた。

今までははっきりと口にすることもなかったのに急に大学進学は当然だといひ始めた。そして三月も間近に迫った或る日に、急いで予備校に行こうとすると範行が数か月ぶりに話しかけてきた。

「おい、敏雄！お前、俺が殴ったことを恨んでいるのか？」

「いや、そんなことは……」まさか当たり前だともいえない。

「あれ、憶えてるか？」

「あれって？」

「音楽の課題だよ。【いざ起て戦人よ】」

「ああ、まだ合格していなかったな。でもあれから何回も音楽の授業があったけど大野先生、何も言わないからもう忘れてるんじゃないか？」

「お前は呑気でいいよな。俺なんか停学のためにどの教科も出席日数がぎりぎりです。期末で赤点を取ったら留年だよ」

「留年？そういうえば一年の時は留年した先輩がいたけどいつの間にかやめちゃったな」

「やめたんじゃないよ。自殺したんだ」

「え？」

「まあ、俺はやめるね、恥ずかしいからさ」自分で蒔いた種とはいえ少しは可哀そうにも思えた。「そういうえば碧も危ないだろう？」

「あんなの完全にアウトだろう」

「それで音楽が心配になってきたってわけ？」「そうだよ」

敏雄はけれども冷たく言い放った。「俺は音楽のひとつくらい単位落としても大丈夫だぜ」そして踵をかえして「敏雄！」と引き留める範行を振り払い帰宅してしまった。そこで彼に同情してしまつてすんなりと追試をやる自分が許せなかったのだ。少し以前の範行なら鉄拳制裁するに違いない行為だった。

ところが、翌週には、しのぶと碧がやってきた。しのぶは眼に一杯の涙を浮かべていた。

「敏雄くん！お願い！試験を受けて！私たち、大野先生に聞いてきたのよ。やっぱり【いざ起て戦人よ】に合格しなければ音楽の単位をやらないんだって！」

「大学の入試にはな、音楽は必要ないんだよ」

「だから私たちが困るんだって！あたし、今年は停学が少しあったけど、去年は病気で学校をかなり休んでいるのよ。出席日数は通算なのよ」「ややこしいなあ」

「碧はね、親が交渉して音楽さえ単位を取れば留年は免れるの。いじめもあつたから」

しのぶはとどめを刺すように云った。

「混声合唱は四人揃わなければ合格できないのよ！」

「お前な。自分で説明しなよ」敏雄は面倒くさそうに碧に云った。ふと見ると碧も泣いていたのだった。そのときぶつぶつと碧が呪詛の言葉を吐いていた。

「なんだよ。聞こえないよ」

「……うまく唄えないのは敏雄だけじゃん……」

敏雄は完全に頭に血が上った。碧は生意気だと思つた。

「ああ、そうだよ。それならそうと、もっと早く言えばいいじゃんかよ。なんで遠慮するんだよ。毎日、顔をつきあわせてるじゃないかよ。なんで、あと何日もなくなつてから云

うんだよ。……ちゃんと唄ってもバスの音じゃないんだよ。声が高くて。」

「声をつぶしなさい。それしかないわ。今日から二日間唄いつづけるの。ソプラノで【いざ起て戦人よ】を。そうすれば間違いなくつづれる。低音になれる。」

しばらく考えていた。そしてそれはなかなかいい案に違いはないと思った。要は、大野先生は才能しか評価しないんだ。そうだ。努力してもダメなものはダメなんだ。

「うん。それしかなさそうだな」

「あと大野先生に変なことを言うのだけはやめてね。音楽の単位なんか大学には関係ないだとか」「そりゃそうだ」

帰宅してからは二日間というものの唄い通した。もちろんバスの遅れて出る部分や目立たないところもしっかり強調した。碧の言葉を信じるなら、俺さえ上手くなれば必ず合格できるんだと。だがバスの箇所だけではまったく別の歌ほどに違っているのだった。そして結局、その箇所のみを聞いたことは一度もない。おそらくは、合格した連中も合唱部員ほどには満足に唄えた者は居ないに決まっていた。譜面をみて唄ったところ、しばらくして単なる音の高低の問題じゃないということに気が付いた。それなら合唱部の堅田に教えてもらおうか。恥を忍んで。癪に障ったが夜中に電話をかけた。堅田とはほとんど話したこともなかった。

彼は気安く応じてくれてもう二十二時を回っているのに自転車で作ってきた。バスのパートを申し訳ないから一回だけ唄ってもらってカセットテープに録音した。「君たちは揃って耳が良くないね」「どうして?」「どうしてって、クラスの他の人たちは俺らが唄うのを聞いていてけっこう真似して初めから唄えていたぜ」「はいはい、そうですか。他人のマネができないんだらうね、僕たちは」「うん、そういうことなんだろうな、でも結局は耳がよくないだろう?」「はあ?」「君、耳鼻科とかに通っていたらう?」ああ、そういうええ。「うん通っていたね。よく中耳炎になって、そうだな手術したこともある」「まあ、他の奴の歌なんか聞かずに自分のパートさえ唄えば大丈夫だよ。大野先生はバスしか聴かないだろうから」それから何度も、そう、四十回くらいは繰り返し唄った。明け方になって鳥が鳴きはじめるころには疲れ切っていた。ストップウオッチでどのタイミングかを計った。あとは他の三人が、おなじスピードで唄うことを祈るばかりだった。

教室にはいる瞬間に三人が休んでいないことを願った。そんなことも初めてだった。六時限が終わり四時を過ぎるころに四人とも無言で集まり、特に約束したわけでもないのに音楽室に向かった。途中で不安になったのか、しのぶが聞いてきた。

「練習してきたらうね」

「ああ、ばっちりだ、おう、練習しながら行こう」誰も異論はなかった。

廊下を歩きながら四人は大声で【いざ起て戦人よ】を高らかに唄いつづけていた。うん、よくわかかんないけど大丈夫じゃないの、話すのはしのぶだけだった。誰も他人のパートを聞いていないのだからよくはわからない。聞けば自分の唄うパートがずれてしまう。

「おう、来たか!」大野先生は口調は驚いたようだが、表情はあっけらかんとしていた。彼はさまざまな事情を何にもしらない。なんでこんなに頑ななんだろうと敏雄は呆れた。

「今日が最後だろうな、まあ音楽の単位なんてなくても留年にはならないから心配するな」……おい下手なら落とすつもりかよ

敏雄の頭の中は合唱部の堅田の模範的な歌声ばかりになった。彼はさすがに巧かった。

それをなぞるように慎重に夢中になって唄いつづけた。すると不思議なことにしのぶの声
が碧の声が範行の声が混じり合うように聞こえてきてうねりながら大きくなって危うく呑
みこまれそうになる。それで少しボリュームをあげた。廊下の時とは違うのだ。妙に力が
入って大声になっている。けれどもバスは大声を張りあげるわけにもいかないのだ。

♪うたごえ、あわせーて うしおの ごとくに ごとくに

せいぎの みーかーみは われらの まーもーり

西日が、葉のないポプラを染めていた。ほんの数分の時間が長く長く感じた。結果を聞
くまでもなく敏雄は満足していた。結果を聞かなければならないのは他の三人だった。(了)